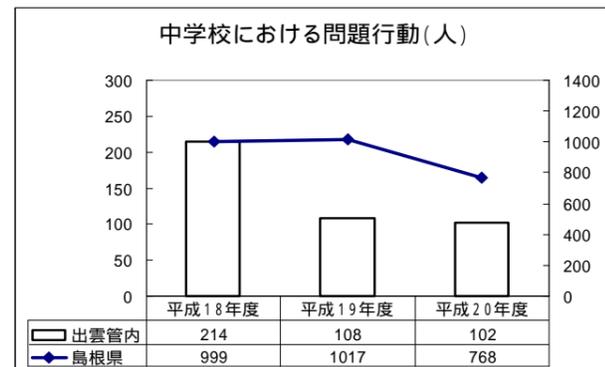
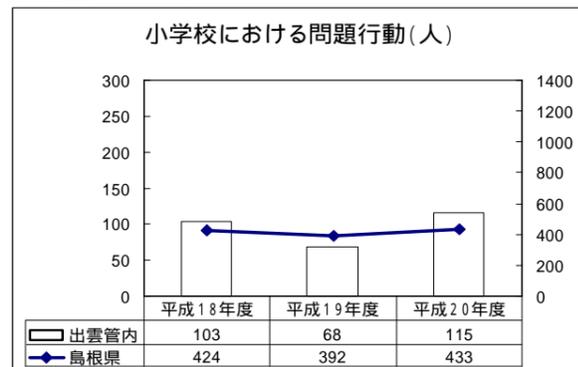


1 問題行動について



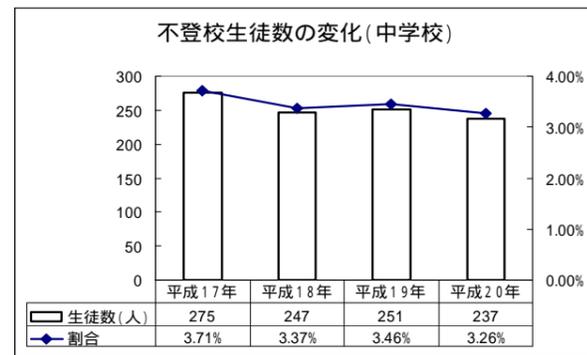
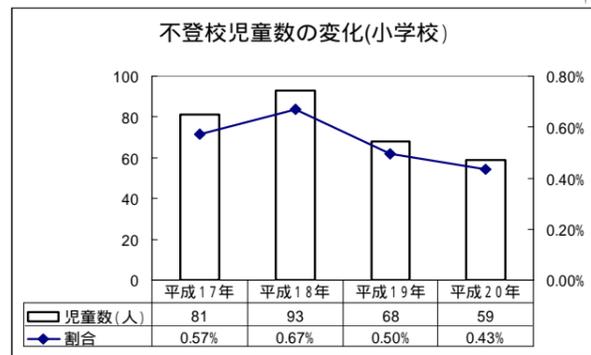
小学校は増加傾向にあります・・・低年齢化が懸念されます

管内の小学校の問題行動は、増加傾向にあります。平成20年度は、平成19年度に比べて人数比で1.7倍となっています。特に、「火遊び・放火類似行為」が増加しました。また、昨年度は「線路への置き石」も数回発生しています。安全教育の一環として、興味本位のいたずらが重大事故を招くことを、低学年から指導する必要があります。また、問題行動の低年齢化の傾向がみられます。警察と連携して発達の段階に応じた非行防止教室を開催し、早期から規範意識を醸成したり、保育園・幼稚園との連携を深めて多面的な児童理解に努めるなどの未然防止の取組を推進することが大切です。

中学校は減少傾向にあります・・・更なる指導の充実を！

管内の中学校の問題行動は、減少傾向にあります。特に「生徒間暴力」・「器物破損」・「喫煙」は大幅に減少し、落ち着いて教育活動に取り組める状況が続いています。このことは、生徒指導主任・主事を中心に学校全体で規範意識の醸成などに取り組まれた結果だと考えられます。今後も、問題行動を早期発見するために、日頃から子どもの表情や言動等に表れる変化に気づき、教職員間で情報を共有し、学校全体で組織的な対応をすることが求められます。

2 不登校・いじめについて



不登校は減少傾向にあります・・・昨年度は特に小学校が減少しました

管内の小学校・中学校における不登校児童生徒数は、平成19年度319名(1.52%)から、平成20年度296名(1.42%)に減少しました。小学校は全児童に対する割合が0.43%となり、県全体の0.46%より少なくなりました。不登校の状態から学校復帰をする児童生徒も増加しており、各学校での不登校対応が適切に行われている結果だと思えます。

ただ、中学校においては不登校傾向の生徒数は横這い状態であり、別室登校(学級以外の保健室や相談室で過ごす)が増加しています。学校での対応も、個々のケースに応じた個別な支援がこれまで以上に求められています。不登校対応の教員がコーディネーター役となり、関係者によるケース会議で早期に支援方針を決め、教職員の相互理解のもと全校体制で対応することが重要です。

いじめの発生件数は減少していますが・・・子どものサインを見逃さないで早期対応を！！

管内のいじめの発生件数は平成18年度をピークに減少し、平成20年度は小学校14件、中学校16件となりました。定期的なアンケート、教育相談の実施や日常の観察、保護者との情報交換などにより児童生徒の状況を把握し、早期に発見・対応することが大切です。

今年度の生徒指導研修は「集団づくり」をテーマにして進めています。  
「ルールの確立」「リレーション(関係)の確立」の2つの視点から集団の育成に取り組んでいきましょう。

# 所報 管内の教育

第29号

主な内容 1 所長「ふるさと教育」の充実を目指して  
～学校と地域との連携の4ポイント～  
2 教科授業力向上セミナー 小学校国語・中学校外国語  
3 生徒指導だより

出雲教育事務所  
平成21年10月



## 「ふるさと教育」の充実を目指して ～学校と地域との連携の4ポイント～

所長 三島修治

平成17年度からスタートしたふるさと教育推進事業は、第2期(H20年度～H22年度)に入り、現在、県内各地で積極的に取り組まれています。

第2期は第1期の成果と課題を基に、更に実践を重ねながらその方法論の熟度を高めること、さらに、地域人材の発掘・供給の流れを円滑にするために学校と公民館、コミュニティセンターとの連携を深めていくことを目指しています。

今年度の出雲教育事務所管内「ふるさと教育講座」では、学社融合研究所の越田幸洋代表の講義と学校、公民館・コミュニティセンター、ボランティアそれぞれの意見をお聞きするパネルディスカッションを設けました。

今号では、今後の参考としていただくためにこの「ふるさと教育講座」の内容から、各学校と地域とが連携して取り組む活動のポイントをまとめましたので紹介します。各学校の推進体制の参考にしていただきたいと思います。

### ポイント1：ふるさと教育の原点は「ひと」

ふるさと教育においては、「ひと」(児童生徒)と「ひと」(地域の方々)とがふれあうことが原点である。「もの・こと」も必ず「ひと」を媒介して存在するものであり、そこに関わる「ひと」とのふれあいにより、子どもたちは、様々な生き方や考え方、価値観に触れ、自分自身を確立していく。

そこで学校では、「ひと」とのふれあいありきではなく、ねらいを達成するために、どの学習活動のどの場面で地域の方の協力を得ると効果的かという授業構想こそ必要となる。そのことが「ひと」とのふれあいの在り方をより明確にすることにつながる。

### ポイント2：子どもたちと地域の方とが「感動」を共有する学習場面を構想する

地域の方々子どもたちの目の輝きやつぶやき、感想等の言動、姿から「感動」を得たとき、自己の学習に対する意欲がこれまで以上に高まったり、支援・協力への積極的な態度が醸成されたりという成果がある。そこからは、支援・協力を提供する、受けるという関係ではなく、互いが学び、高めあうという成熟した連携関係が生まれる。学校と地域が連携した取組を進める際の授業構想に、感動の共有は忘れてはならない視点である。

### ポイント3：「地域が子どもを育てる」、「子どもが地域を育てる」という視点をもつ

学校では、地域の方々の支援・協力によって子どもたちの育ちや学びが豊かに、確かになってきていることは誰も成果として確信していることである。

一方で、かかわっていただく地域の「ひと」や地域そのものが子どもたちに育てられているという成果があることに目が向いているだろうか。子どもたちに関わりながら、地域の大人は、地域で大切に、伝えていかなければならないことや改善していかなければならない課題等を発見、再認識する。それは、自分たちの地域を守り、よりよくしていこうという地域づくりに参画するという行動につながっている。言い換えれば、大人が子どもの学びを支え、子どもの学びが、大人の学びや行動を生み出すという関係が構築されつつあるということである。

### ポイント4：「学校」からの情報発信と校内の推進体制の充実を図る

学校と地域との連携の出発点は、学校が、地域にどのような支援や協力を必要としているかという情報を発信することにある。学校と子どもに対する地域の関心は高く、協力したいと胸に秘めているがチャンスがないという「ひと」はたくさんいる。そのような「ひと」を活用するため、学校では、情報を取りまとめて整理し、連絡調整に当たるコーディネーターの存在は今や欠かせない状況となっている。その役割を誰が、何のために、どう果たしていくのかという協議を、校内及び公民館、コミュニティセンター等と綿密に行い、共通理解を図りながら推進体制づくりを進めることが大切である。地域によっては学校支援地域本部事業の「地域コーディネーター」の協力を得ることも有効である。それに加えて連携のシステムや手法については、全教職員が理解しておくことが必要である。

以上、4つのポイントを紹介しました。

本年度の「ふるさと教育講座」には、学校関係者100名余りに加え、社会教育関係者等も約90名参加していただき、正に、学校関係者と地域関係者が共に学び、考える場となりました。心から感謝申し上げます。

第3期(H23年度～)は、それぞれの学校が、地域と更に連携し、主体的・継続的に「ふるさと教育」を推進していくことを目指しています。そのためにも、引き続き、各学校・地域において児童生徒、地域関係者双方の心が踊る実践が展開されることを期待いたします。

# 教科授業力向上セミナー

# — 小学校国語・中学校外国語 —

斐川町立斐川西中学校〔6月23日(火)〕, 出雲市立大津小学校〔7月8日(水)〕を会場に、『教科授業力向上セミナー 中学校外国語 小学校国語』を開催しました。  
この研修は、平成20年度の島根県学力調査及び全国学力・学習状況調査の結果を踏まえ、公開授業や講義等を通して、教科の授業改善のための実践力の向上を図ることを目的とするものです。  
小学校国語 は筑波大学附属小学校の白石範孝教諭による5年生の公開授業・授業研究、中学校外国語 は筑波大学附属中学校の久保野りえ教諭による2年生の公開授業・授業研究、そして講義・演習を加えて実施しました。参加者の感想から、それぞれの研修の概要をお知らせします。

## 小学校国語



公開授業 「児童の主体的な読みを育てる指導の実際」  
【題材名】「あきあかねの一生」

### 公開授業

説明文の学習の中で、学年段階を追って身に付けていかなければならないことを再確認しました。「方法を教える」ことで、子どもたちに力をつけていくことができると感じました。  
全員が参加できる授業、子どもの考えを整理して明確にすること、間の空け方、子どもたちをほめる言葉が多いこと、指示が明確であることなどたくさん参考になりました。  
子どもたちに教えるべき内容と、既習事項を生かして自分で読ませる内容。両方の大切さとバランスの大切さを感じました。

### 協議 研究授業

指導者の細やかな気配りとこだわりがあれば、同じ子ども、同じ教材で授業をしても、流れや内容が大きく変わり、子どもにつく力も変わってくると実感しました。  
説明文での意味段落の分け方が、自分の頭の中でしっかりと整理できました。音読指導もパターン化していたので、とても参考になり、明日から実践していきたいです。  
ノートの書き方や音読のさせ方等、細かなことの積み重ねの重要性を再認識しました。

### 講義・演習「考える国語の授業づくり」

国語力として、身に付けさせたい力の大切な部分を学ぶことができました。他へ生かせる力を付けることの大切さが分かり、これまでの国語研修では学んだことのない内容で大変参考になりました。  
感覚やイメージに頼る授業を今までいかに自分がしてきたのかを感じました。原理・原則を教えることの大切さがよく分かったので、学んだことを生かしていきたいと思えます。国語っておもしろいなあと思いました。  
説明文は論理を読むということ、文学作品は因果関係を読むこと、また、低学年から高学年へ向かって何を身に付けさせておくかという見通しをしっかりとつ必要を感じました。



## 中学校外国語

### 公開授業

久保野先生のように使えば教科書が生きてくるということが実際の授業を通して学ぶことができました。  
初めて出会った生徒とも、オーラルイントロダクションを中心にして、教科書を見ずとも本文の内容や表現を生徒たちがどんどん吸収していくのを見て、正直驚きました。  
特別な教材や教具を使わず、教科書を使って指導することに苦手意識がありましたが、本時での生徒の目の輝きを見ながら、基本に戻って授業に取り組みようと強く思いました。  
久保野先生が魔法使いのように見えました。おもしろく話される内容が、教科書の内容ときちんとリンクしていて、授業構想の大切さを感じました。



公開授業：単元名 「Unit 2 Emi Goes Abroad - Reading for Communication」

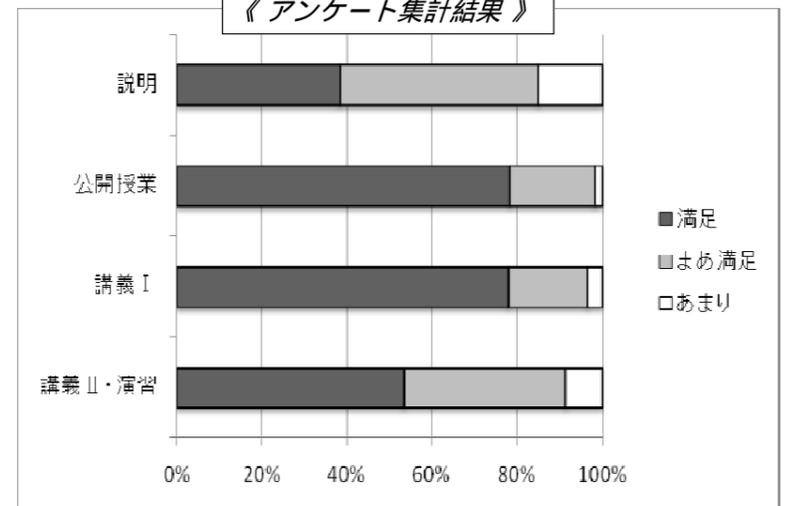
### 講義 (研究協議)

生徒に何の力をつけるために、何をどう指導するかについて改めて振り返っていく必要を感じました。  
本時の指導に関連して、実際のテストを示して説明していただいたので、指導と評価がすんなりつながりました。資料として実際のテストをもらえたことも大変参考になります。  
明日からの授業に即生かしたいことから、英語教育に関する基本的な考え方で、本当にわかりやすく丁寧に指導していただき、よく理解できました。

### 講義・演習(マイクロティーチング)

多くの先生方の考えや日々の授業での工夫など、多くのことを話し合ったり聞いたりでき勉強になりました。  
自分ならどうするかを考える時間が大変貴重でした。先輩の先生方がどんどん授業を組み立てられるのを見て、自分もこんな風になりたいと思いました。  
マイクロティーチングをさせてもらい、いろいろ勉強になりました。特に「生徒にとってどこが難しいかを見極める」が非常に大切であることを心に留めて、授業づくりをしていきたいと思いました。

《アンケート集計結果》



受講者は勤務校において、セミナーで学んだことなどについて報告し、教科指導力の向上を図ることになっています。各校で確かな学力を育てるための授業改善が行われるよう期待しています。  
御協力いただきました出雲市立大津小学校並びに斐川町立斐川西中学校の校長先生、教職員の皆様、児童生徒の皆さんに心より感謝いたします。